

2013年日本国際政治学会「北東アジアにおける国家・地域主義・境界」 (2013年10月25日、日本国際政治学会トランスナショナル分科会)

本パネルは、「北東アジアにおける国家・地域主義・境界」というテーマで、近年、北東アジア地域において席捲している「偏狭な」ナショナリズム的思考から脱却し、安定した地域秩序の形成のためには、どのような包括的戦略が必要であるのかを、韓国、中国、および北東アジア経済の専門家それぞれの立場から多角的に論じることを目的としました。

最初に、福原裕二先生（島根県立大学）からは「領土問題と漁業問題の衝突？—北東アジアの海の実態から」と題した報告がありました。ここでは、日韓の懸案事項である竹島／独島問題について、そこに住む人間たちの生活圏という視点（「第三の視角」）から捉えることの重要性が主張され、いかに〈国家の論理〉が〈生の論理〉を軽視してきた歴史的経緯について、実際の「竹島」の価値と照らし合わせながら論じました。領土政策と漁業政策の交錯した危機的状況の打開のためには、生活圏の内実をしっかりと見据えながら、北東アジアの海を「等しく拓かれた」ものにしていくことの必要性が説かれました。



川島真先生（東京大学）からは、「中国をとりまく『境界』と『国家』—金門島と尖閣諸島を事例に」と題した報告がなされた。報告では、「中国」をとりまく「境界」をめぐって生じている状況を、「外なる境界」と「内なる境界」という2つの視角から分析がなされた。前者の事例は、「中国が本来有する固有の国土」の「曖昧な領域」に属した尖閣諸島であり、後者は、軍事境界地域の最前線として位置していたが、近年では交流の場として中華人民共和国と中華民国を媒介する存在へと変貌した金門島の事例を紹介していただきました。歴史のなかで失われてきた「国権回収」と領土回復の試みが、現代中国の「自画像」と重なる点について、様々な一次史料を読み解きながらの報告でありました。

三村光弘先生（環日本海経済研究所）からは、「北東アジア経済交流における『境界』の意味」と題した報告があり、北東アジア経済交流においては、「境界」が大きな意味を持ち、その機能を明らかにすることが、今後の経済交流の促進のために重要な意義を持つことが論じられました。そのなかで、冷戦終結後の北東アジアにおける経済交流の動向を、図們江地域開発、朝鮮半島の南北経済交流、および環日本海経済圏の拠点である新潟と対岸との交流などに触れながら多角的な視点で議論されました。

続いて、討論者の岩下明裕先生（北海道大学）から、「構築」、「利益」、「フィルタリング」という境界研究の 3 つの視点から、それぞれの報告者の取り上げた事例がどのように理解できるのかという質問がありました。川久保文紀先生（中央学院大学）からは、地域研究が問題解決型のアプローチを取るために必要な視角、「外なる境界」と「内なる境界」の意味論、北東アジアにおける政治的・軍事的な境界と経済的な境界の関係性などについて問題提起がありました。フロアからも、環日本海経済圏における沿岸自治体の協力関係の必要性、領土・国境問題における実証分析の重要性、領土・国境政策における政策決定者やメディアの役割などについての質問があった。テーマが時宜にかなったセッションでもあり、多数の参加者を得て、非常に盛況なセッションとなりました。

*本エッセイは、2013年10月25日の日本国際政治学会トランスナショナル分科会を組織したGCOE共同研究員の川久保文紀（中央学院大学）と司会の池直美（本プログラム事業推進者）が記したものです。